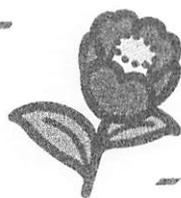


礼拝

令和8年1月26日
7号



大島忌

～感謝の誠と捧げましょう～

本日は、現在の京都文
教学園の基礎を築かれた
大島徹水（おおしまとすい）先生
のご恩に感謝する法要を
営み、全校を挙げて今後
の学園発展に尽くすこと
を誓い合う日です。

大島先生は一八七一年
に生誕され、九歳のとき
貞照院というお寺で出家
されました。戒律の厳し
いお寺でしたが全てのこ
とに堪えて修業を積ま
れ、質素儉約の生き方を
学び、生涯実践し続けら
れました。

一九〇四年、獅谷佛定
（こしたにぎつじょう）上人を中心
に「私立高等家政女子校」
が開学されました。仏教
を基盤とした建学の精神
や熱心な指導が評価され
生徒数が急増しました。
そのため校舎の増改築が

必要になりましたが、資金面で見通しが
立たず閉校が決定しました。「教育の不
十分さが原因で閉校するなら諦めもつく
が、学校の真価が認められ、本校を信頼
して入学した生徒たちを別の理由で犠牲
にはできない」との思いから資金調達を
行いましたが、校舎の改築には不十分で
した。そんな中、主幹となった大島先生
は資金調達に奔走し、その力添えを得て
廃校の危機を回避しただけではなく、よ
り大きな土地への移転をも成し遂げまし
た。

一九三〇年、大島先生は第三代校長に
就任されました。校訓として清純貞淑・
感謝勤労・敬上慈下・天物尊重を掲げ、全
校集会で訓話を行い、また生徒による自
治を徹底しました。この頃には、さらに
生徒数も増え、校舎増改築等の課題が山
積していました。この解決のため、岡崎
円勝寺町（現在の学校）が選ばれました
が、土地購入や校舎建設費の七十五万円
（約十五億）をいかに集めるか、大島先生を
除いては誰もが見通せない状況でした。
しかし、一九三四年九月、本館（現在の二号館）
が見事に完成し竣工を迎えたのでした。

同じ頃、大島先生は東京の大本山増上
寺の法主に就任され、ひと月の半分を本
校、残りを増上寺という二重生活を始め
られました。その激務もあり一九四五年

一月二四日、本館の居室で七十五歳の生
涯を閉じられたのでした。

大島先生は一度目の移転時、既に再移
転の必要性や資金繰りの困難さを予測
し、今度は独力でやらねばならないと覚
悟をされていました。「一私学の校長が
一念独力で集めるには、七十五万円とい
う額は冷嘲を買うに十分な数字だが、家
政女学校の地鎮祭は確かに行われた」と
報じられました。先生はわずか十数年で
人知れず資金を貯えるという、奇跡的で
不思議な取り組みを実現されたのです。

「お布施の五十銭から多くても五百円を
超えない」という新聞記事からも、零細
の寄付がいかに多く集まったか思い知ら
されます。また、卒業生の結婚に際し記
念の寄付があり、既に母となった卒業生
は「お金がないのでせめて労力を差し上
げたい」と、子どもを負い、子どもの手
を引いて大島校長の元を訪れたそうです
。岡崎キャンパス設立にはこうした涙
ぐましいお話が数多く織り込まれてお
り、大島先生の人となり、そしてそれ故
の偉業を物語っているのです。

二度にわたり本校の危機を救い、維持
存続・隆盛へと発展させた功績、そして、
総合学園としての基礎を確立された功績
は、まさしく学園中興の祖であり、その
大恩に感謝の真を捧げたいと思います。